

「反省の問題」は本当に問題なのか

フッサール現象学における「生き生きした現在」の謎についての再検討

佐藤 大介(岡山大学大学院)

本論の目的は、フッサール研究における「生き生きした現在への反省の問題」が、議論の余地のある前提に基づいて立ち上がってくるということ、を論証することにある。この論証は、次の手順で考察を進めることによって行われる。まず、「生き生きした現在への反省の問題」がどのような問題なのか、その概観を示す(1)。次に、この問題がどのようにして立ち上がってくるのかを、確認する(2)。そして、この問題を立ち上げている前提には議論の余地があることを示す(3)。最後に、以上の議論がどのような展望をもちうるかを、簡単に示す。以下、それぞれの手順の概略を順に記す。

(1)「生き生きした現在への反省の問題」とは、今まさに働いている意識を反省によって捉えようとしても、反省は「後から」見ることであるために、その意識作用を捉えることができないのではないかと、という問題である。反省の限界に関わるこうした問題がフッサール現象学にとって深刻であるのは、反省がフッサール現象学の根本原理に関係するからである。フッサールは、「直接的に見ること」こそがあらゆる認識の正当性の源泉であるという主張を掲げ、「直接的に見ること」を現象学的方法的原理に据える。フッサールによれば、反省は「直接的に見ること」の模範とされる。それゆえ、フッサールは、反省において直観的に与えられるものに基づいて、意識作用についての分析という課題に取り組むことになる。しかし、反省が今まさに働いている意識を捉えることができないならば、意識作用が今まさに働いている場面に関しては、現象学的方法的原理に従った説明を行うことは不可能となる。意識作用とは今において機能するものことなのだから、それが反省という現象学的方法によって捉えられないことは、現象学の根本的な欠陥を示すことになる。

フッサール現象学の方法と目的の齟齬を示唆するこうした「生き生きした現在への反省の問題」は、クラウス・ヘルトが『生き生きした現在』(一九六六年)の中で論じて以来、フッサール研究の重要な論題の一つとなった。ヘルトとそれ以降の研究者は、フッサールの後期時間論を基にして、この問題への対応を論じている。彼らは、その対応をそれぞれ異にしているが、「生き生きした現在への反省の問題」が真性の問題であることは、共通の見解としている。この見解は、フッサールの初期時間論に支持されている。すなわち、「生き生きした現在への反省の問題」は、初期時間論の領圏から立ち上げられる。しかし、「生き生きした現在への反省の問題」は、本当に初期時間論から立ち上がってくるのだろうか。本論では、この点を検討したい。では、「生き生きした現在への反省の問題」は、初期時間論の領圏から、どのようにして立ち上げられているのだろうか。

(2)先行研究は、意識作用が「幅のある今」において反省的に捉えられ、且つ、その「幅のある今」が「後から」捉えられた今である、ということに基づいて、「生き生きした現在への反省の問題」を立ち上げている。「幅のある今」というフッサール現象学独自の概念は、時間の最小単位としての今が、時間的幅を有することを意味する。フッサールはこの概念を、メロディー知覚についての分析を通じて採り入れている。メロディー知覚において捉えられているものは、個々の瞬間的な音ではなく、メロディーとしての音の流れである。その流れが今において捉えられることは、その今が幅をもっているからこそ可能である。こうした「幅のある今」は、反省についても当て嵌まる。つまり、メロディーと同様に、意識作用もまた、時間的流れにおいて延び広がったものとして、反省的に捉えられる。それゆえ、意識作用が「幅のある今」において捉えられているとい

うことが、導出される。次いで、フッサールは、時間的に延び広がった意識流が如何にして構成されるのかを問う。フッサールによれば、意識流は、今まさに働いている意識が志向的对象へと向かいながらも、流れることの中で自己自身を構成していることによって生じる。ただし、意識流を構成する意識を、構成される意識流の中に位置づけてしまえば、高次の構成する意識が要請され、以下同様にして無限後退に陥ってしまう。それゆえ、フッサールは、今まさに働いている意識を、一切の構成に先立つものに位置づける。ここで、先行研究は、今まさに働いている意識が一切の構成に先立つことを拠る所に、反省において捉えられている「幅のある今」の中には、今まさに働いている意識は含まれてはいないと解釈している。それゆえ、その「幅のある今」は「後から」捉えられたものであるということが、導出される。こうして、反省において捉えられた今と意識がまさに働いている今との間に原理的な相違が生じ、「生き生きした現在への反省の問題」が立ち上がってくる。では、この問題の立ち上げを基づけている「幅のある今」についての解釈には、議論の余地はないのだろうか。

(3)反省によって捉えられる「幅のある今」の中にまさに働いている意識は含まれてはいないとする先行研究の解釈には、議論の余地がある。なぜなら、先行研究の解釈は、メロディー知覚についての分析がおかれている文脈を、十分に考慮したものではないからである。フッサールは、メロディー知覚についての分析を、今まさに働いている意識作用の時間性を説明することを意図して行っている。そしてフッサールは、流れゆくメロディーがまさに現出し、また、現に捉えられている今を、「幅のある今」として説明している。こうした「幅のある今」を反省に当て嵌めれば、流れゆくメロディーが現に今捉えられているのと同様に、流れゆく今まさに働いている意識も、現に今捉えられていることになる。このように、メロディー知覚の分析がおかれている文脈を考慮に入れるならば、「幅のある今」に関して、フッサールの見解と先行研究による解釈との間には、対立が生じる。たしかに、先行研究が示すように、フッサールは、意識流の構成に関する議論において、今まさに働いている意識を一切の構成に先立つものに位置づけている。しかし、メロディー知覚についての分析がおかれた文脈を考慮しつつ、意識流の構成に関する議論を再検討してみれば、今まさに働いている意識が一切の構成に先立つことは、先行研究の解釈を支持しないかもしれない。この点について論定を下すためには、まず、フッサールがメロディー知覚について行った分析が、妥当なものであるか否か、吟味される必要がある。そして、もし妥当なものだといえるならば、さらに、「幅のある今」についてのフッサールの見解が、意識流の構成に関する議論においても、その妥当性を維持することができるのか、検討される必要がある。その上でなお、そのフッサールの見解を妥当なものとして認めることができるならば、「生き生きした現在への反省の問題」は、少なくとも初期時間論の領圏からは立ち上がってこないことになる。

「生き生きした現在への反省の問題」が初期時間論の領圏から立ち上がってこないとすれば、フッサールは、後期時間論の中で、「生き生きした現在」に関して何を問題として論じているのか。これに対しては、後期時間論では、今まさに働いている意識を反省によって捉えた上で、その捉えたものを言語化することに伴った問題が論じられていると、解することができる。言語化は、反省によって捉えられている動的な事柄を静態化してしまい、反省において捉えられていることを上手く表現することができないという困難を、抱えているのである。